特別
へ 5
6708

序ニ曰

ねうと笠や

風俗そうべ

花の場

梅月堂

周子

酉堂書庵

日民百くさ
李長大宿

俳諧塗笠序

玉鉾の道歩よ
世の栄ひ
人の字ヲ部トシテ
笠付トタ名付テ
未ダ句ヲ纂
玄裕玄恰遠慰

樂なんと爰ヲ
そへぬ
元禄十丁巳年
如月
浪花
西鶴菴

芦鳴
芦鳴
義

▲そそうしや 思点
そへぬひとそへ
鍋炭いそる 火ぢち箱
出掛をそつ 参ル
ぬで戻ル 岩清水
はるむ雀の 月れ怪さ

▲月てたり 目点
さしれべる こちの鬼
奴 辛を出し 白屋等
拵 ぶりしい 白よい魚
奴郎ぐせで 賞 甲

▲はくとし　俳員点

万年宿の首　俳

小濱の吉米の留土

兩替人世の　清菊雄

客人新の　海千鳥

▲氣のぞして　俳員点

夜ハ六つ指もし素足へ

天窓のふけを比丘尼

炭焼をろろ塩の丈

饗でも毛沖利　大工小屋

▲まろうきう　万鳥点

煤掃ひ通り鍋

鍋乃鯨のさいで　深

籠の用をとむきりくを

明珠よ移らせ釈迦

▲ぶらくと　万鳥点

鈴の尾うごくやさきを

きを複の袖を　屋を敲

寄るの反付く　蕗の首

蕎で鞍馬れ石　鳳

こつや質の巣　巣の蜂の巣

魂の出る　笛の　脂

いなごに言キ　義のをそて

山吉の尾で　掃　桃

▲あつさうや　園水点

庭よりさぐるしのぶ草
さゝさの根の桔梗萩の時雨
もゝぐさの花白ものゝね塚
蒹葭根扉　生り　飄

▲さハ〳〵と　同点

血の評判の止む　茜
千鳥もゐる寝ぬ磯の波
園乃　柳をねる春日
名殘のさゝぬ通り庵
祝びよ末て同冥途
余所の嫁入べよ白とり

暗のうめの紀よ夏丹実

▲浪よ末て　賀子点

三会ア　沖十念
沒取り　を　意緑と緑

▲おそひつゝ　同点

牛ぐやぶさ矢射在石
浄物三十の男盛り
ボタチてゐ声かゝ
菊祀しかる猿のゐり

▲とんと高　同点

らぬ翻さるゐ蕎

ム冥なけのふ奥入
念佛のやむ廻向床

賀子点

▲糸付て
脳乳でさるくろ首
脳るもりのつさ入
菓子はし番たるの物
みた解引ク　鮑貝

同点

▲果子の
きうり解を主ぶりう
茶屋の脳さへ載て
元目ようえ　扇袋

▲ひ称うて　賀子点
脳治やうくろ索色酒
奴ねぬうぬ作刀
おじゞ盗ン　鬼のうぞ

▲ちうさして　同点
掠うう家さ庚次のまゝ
ぐいさよ成し仁王反
大黒よ仏ぬやせ師ス
連の天窓をあり宿泊

▲とぢあひて　同点
能よ尾ようる　氷解

七月の月まし夜明ける
千さ連の　　千ごまめ

▲はくそう　賀子点

書を　紅女子　大形日

禁中の栄ハ京の水

廉しぐるる木履

古灯行よ　蝶の文字

▲けりがり　同点

売を　左敷　寺

喰ひ　家き　腸　病

よに付てゐる多の太

▲ゆくく　因水点

かうに春の　ごろ

如に　流れ　掩り

待る日　書　者

赤貝　ゆ家　書

子丸　果さぬ　人形見世

▲大坂で　同点

花のかりに　極山　新

身るぬりの　米ハ

くもり　おれり　時る

▲庁　一礼点

すぐち　煙　ふれ　おし

甲　変る　癒　ごま

小便　ふる　ぶり　嗜

姫はうごうぬせあ会仏
者神建る　法花寺

▲きゝてない　一礼点
坊主の友を　四方髪
如布切るくおりびでし

▲いまておくく　月点

古井でちきる雛支婦
敗屋で夜明を知る蛍
鞠ゞ粉ぬうれねもう計
不儀の長持もひ札
公家の髪付　帝仕具

▲ちくくと　日点

美人びのもる人の肥
月乃出沙のぬどもれ

世界　南人　ちる暑
るの中をとう　事記海

▲ひろげまり　一礼点

屏風よ咲をかきつぐる
菓子の天狗　さげ孫
木綿帆船ス　袋蜜
茅よのもく　小多夢

▲うゝ山し　一礼点

魚せぬ人のうるいびさ
花見ぬ京のもるし
きゝ京朱座の居商

▲打くく　月点

茅屋の桃灯　狩紙むり
如果質屋へ　帝来迎

▲まんぢゅうは　一礼点
宝　六月　十五日
男むしもの　狗脳　縄
香の糸あり　笠の辻
火吹竹　ふる　庵の宛
▲いそぎや　月点
なれて　ふる　箸
出立食　くこけ　ふど
奥見　ふく　流す月
傷　寒　年のあんがいし
下女　演　打　あり　餅
柳　強　しの　玉　さす
▲かさまつ　園水点
男むすび　れ　蓑の　厩

[illegible]　乳のむし　れ下　寒
旅　立　まく　のふ　こつ
▲ものず　ぬ　園水点
ゑむ　ごん　さす　石板　木
すぐ　ちぐ　さす　太刀　作り
▲はは　て　月点
やうん　町の　庵　禅　薄
笛　ふら　ゑま　ひ　茶　風　簾
法　師　火　来　山　法　師
嘸　の　屋　れ　ら　や　合点
嵐　ハ　ぢ　ぬ　人　れ　ん
▲うれ　ぶり　月点
塔　ん　せ　る　く　病　上り
虫　を　ざ　や　ん　白　仁

みひろうすあんじゃ

▲おちそうな　国水点

いぐ栗うしの尾よそぐ

火ハ桃灯の棒とし

鼻ゑるすもろう　廣家老

▲りきしこり　同点

勝手ばくよて兄の屋敷

白強よごす　紙治や市ゑ

作くうれ　京掛屋

掛ハ黒む　松の枝

やのくの絵の点の姿

▲ちりふるもの　万海点

中ゑ深紙　伊勢言葉

長きりんきの却ひ治

▲くちゃいるう　万海点

ゑ姉　藻よのろいかご

白菊咲を　蔵屋敷

枝妹屋ゑはるくでふふ

▲出りつて　同点

家とりむろる　蛇年

待くつさめ

言にかれる　ゑ物のうう

武者絵　合　この日

脇の白河　賣ゝ　円紙

▲ふいけいで　同点

法花ゑ　紙江戸屋

風呂屋で出合あびせ

▲宵ぶんハ　万流点
夜ゐなりし　菱屋
夫の子供ハ　嘆の知
石仏とく　石の破
紅粉さし　接　白椿
山刀中ゑる　春霞

▲月のまくよ　同点
乃ち夜ゐざこ　仰の庭
新清ちゑ　涙芝居

▲ちよこ〳〵と　同点
杖の抑ゑの　仰文坊
ゑれ口もち　丸うゝみ
せ強ちゑは〳〵　歳紙の大豆

▲まれかゑ　万流点
法法大師よ　ようゐゑ
お腹ちゐれ　梅ノ香り
牧原廉ゑム　わくごさん
銀川の異れ　夜の出合

▲きハまつて　同点
尼よやゐる　湯腹
婚よまちゐ　奉女文
ゑるやきき　蒸の巣
生き強りも　高き高野
武士ハゐで　ほ節
引ちひよハ　ハちの
▲いかゐでハ　同点
いちゐ藝も　月の屋

素性もてきこえ高くて
白イ毛見くく 祝多
御ぎ式はじむ 御ぎ式はじめ

▲あつさに万葉点
人の名はさすの意の
書所にてんる小異丁
廉貴嘱ハこつやと云
見ちやよれ年の書居
寸白灸の遊へ 同点

▲ひやうに
師の切炭のおこり口
菱川が絵の作りや
釈よ仏どバとはけむ鬼
詞もめくどむ玉あくき

紙書の婚礼の形
詩の形てちる山の形
▲とくれ
百置寝てけり一夜
見の系地 よの奴 俳点

▲口句や
軍の設主に武士
中在而のと云程ぬ
落して捨るるゆうきい
大根作る 花さうり
ありくは砂ろぞちうち楊
見よう〇てちふんま

▲わきんやき 同点

鍋山や鍋ぬくろ岩
小来栗でるひらきまい

▲むくと　百川点

傍のうちうく沼上寺
水ゴ絵代書　書流し
鳥城の墨　書くて流し
るの毛代引　風ゴり

▲ゑんなうり　月点

徳ゴ徳母の志きぬ
るゴ米のる　梅屋て
年代ゴ絵ゴの絵ゴのん
歌迦の庵湯　湯の花ゴ餅

氷柱ようむう車
弱ルうとるげく親の杖
原を家ゴるキ土すの奥
蛇目の水ハこぬ出ゴ

▲かげさうう　俳月点

月金代前て　奥賞ゴ
ぬせうくもハ黄粉ゴ
咎ない者を投ゴ
なでむで出るうちゴ
蜘昊　美ゴ　練の月

▲さうりゐる　月点

拷ゴやを夫の代福花

背むしのころ茂の柵
押殺さるゝ鮭しもり
伏見へも来る茶の花香
太刀魚くさし 隠の浦

▲きみのちさ 園点

苔く 答る 辛子あり人
青田よはくく 蓼花香
三穂摘ちざる 富士落
味噌買よりて あふる流
よ水筆を噛 明石鯛

▲こんぶうや 同点
蕎よ弱きわう 鮫の坂

播磨鞆
都で痩る 悪の国
笑てしなまざる 蓮の花
泥くゝ生れ
泡の粕でのまずゝ 砕
ゆ流の時を吸と人

▲ぶんくと 伴点
掛 蓼ちさぬ五郎への音
殺 乞ぶんて 和讃
久雑切らもの 後出立
野くゝ飛 早花紋

▲ぶんごろよ 同点
耳色を刺 包後

ひろさ銀て痔の療治
八年ゆておくれ年移
年せよ遅有るらや

▲まつりと一礼点

彩米食の在祭り

▲あつのひて固点

黒らぬ雪れ星光ッ
墨月西り絵の縁り
絵馬月くく西れ書れ

▲三重よ 万点

変さ夜遅ふ女子寺

欲でさくハ飯縄
子ハ御の乱
脉ゲ去るる不責生

▲ほうきり万点

小力ちどん実の栗
質よりは鳴ひさご
かもれと鬼ちす嘗
山蟷仕迎 知略杖
馬草よもぎる鬼わざと
あく西行ゲ 銀の猫

▲ちくと 月点

月の上惜る 磨 炮

どもが嫁やう　娘や
柳より咲て　蕎麦
湯土ゑまくるよりん　女友
鉢の舞ゑる　及ごし

▲ゑむさハ　万治点

ゑうそうて　名ハ
秘もしのの　絶ぬ
貪　後ちぬ　麻物織
なれ羽をする　下の
うそはうぬ　や大の舌

▲やさうとに　俳諧点

ゑハうや〜ゑのこづち
如狐　さうみちやがうや
掻むしらそ　琴の糸
先りでさうる　ゆん
種盛とやうう　ちりんせ
蜀黍根京と　名ゑ下ゑ

▲いさざうし　俳諧点

松をと青　御腸上
七ゑ鍬のま　吐
こちらの方ハ　食上戸
引紐白ム　鯉の紐
花香吹出し　朝茶釜

▲南うや　周点

かいさよ續麦念佛
味よ成ッさる御系紀
心中おろに土板木
横ゲおきさ買てやろ
蕪栃のけで燒牛房

▲たてうとに 固水点

西ノ平延すも秋背長
雲雀よ摺していぬる屋
鳥居よ居ハ月の 燒立
極食ちる 壹
紙庫豆腐の縄つげ
似り字て知ル 大と小

▲変ひろう 固水点

鳴りよに時間夜番
殿のゆるさぬひいへ
宿老の咲しいやるう
坊主とのゲ生る
猫中 花畠
家の長
部屋とを切へる
新多イ 腰ハ 勝なし

▲あさえん 固水点

命よこもる
がいけのお 越恩
今の男を 女島ち

鎧の袈裟は武者の屋士
猪句我身を　人柱

▲打たりて　一礼点

笑後　船を　峠ノ　飛人
鶏鳴の　西よ　敬ひて　参人

片脇をあまと　菖蒲湯
まりまとあ　迎　腰袋

▲あるりとう　日点

すとで　合て　鶏の
人参あらぬ　山家者
奇て　庵を　吟ふ　初日

西鶴点勝句

▲三年ぶりとて　慈悲のもて原
ふさりとあて　切ぬ　新の松

▲今月ハ　長雨かくる　世の人
気ふ　気変人ハ　俗の心そ

▲俄よ　替る　山川の　名
象夫ハ　桐根を　いつる　然つん
五月雨　船の　背ととる　畳の松
百九ハ　名ぎの　ぬ　ぎ　皇　刈て

▲三度　三度　三度　見　者
殺す　蚊の　罪　ふ　君よ　報へし
音ハ　海よ　合る　姿　乱くう
待ハ　行　ぬ　夜の　花

来人のおぼゆ風雅の松

▲心よこあてこやけりへしてこ

雪の夜八殿の茅屋をとぞ掩

討ち入枕ねらぬ月のうさ

来山点賜句

▲何を心ぞ賜る乞食

一日の夏に見そなれた寺

嶽寺の大道声のとりくし

生て居くかぐとんぼとん

▲神ぞうの雨きき言葉成式

傾城て主ぐ生てハいるもほ

女は何ぞすまて浮世ハ

月三うをもさでこそうん命

な書ているぬやうぐさとうろ

盃代とうとうもうぐ別のため

傾城とおりて拾ぐ立しせぞ

▲陽雨を利の川面ノ

大うの泥さんとれで花の川

傾城を深でいせねど男めよ

とそぐつためうつるる編ほと

和もて月のよ茶ハ

ありつとぬけ戸ぶさの一つ

灯燈ぶ付ぬ秀句ぶら作

ぶとしはひぐ夜ぶ行いる走

云うをとをぶ神ぐいぶぐ

▲紀さまてう又殿へ
ゆうんでしうんもあれよ意得
鑑持ハやうなる　馬のと
いうけ毛中の帰支のかくも
帰支迷どうもうれうう
▲夜狼うやうとうくいもも
夕魚のまれ花の大きくて
念仏のはのるもの動くさ
ほのをもよ盗人よりもうう
幽霊代へりて金と清しほど
気遣よ鶏のくへるれ動へ
法行ようけと秋いどうがき

▲何をそれしかみみや
憑ものとれをたのおがれまつり
▲夜明の僧と一時よくに
意夜とがもくもうれ嫁夜
盗人よ我家へんせくれ
れうもあるくさ
いろくよ仰ぎ草ハ袋
るの宵し鶏し行ぐ魚ぐ
乱髪ほにもいもぐうん逢
髪結そえ家婆を結をあて
引入へ男いうもあのりぐ
き月呑水をくぬ中を汲
姑乃ぐちハ嫁こわてし

▲ようこう二十ろく三十の日

かりとめよ西方の五八月九日にて
矢よりとけて盆祭すて一言の女
又独り友吉のみる　新潟
遊人の夜をとうとう扇一古仏
林檎よりは茶にひぬて春吉野川
ちかいかとけ山迎矢よりう
吹ちすすく者を吹ちをせ山桜
宿人よ言葉のくれハ女潮
下戸くりぬまぶよ陸ゲ河女
▲潮をぐりて歩行見もも
とも〇源日ハ分かかまいぬ楊を入
風呂よ浸せ家をそこの迎

▲知ひくどもる離人
知ハ自戸の茶や夜中そ
酒屋のハ三つうけ有ち房
絵すくるそ中ハ恋慕の思地
此町よ親のもくるる男ふ
青熱の中にあの声人そ
人年の嘆ハ常ひ嘆ひそ
▲むさくるよ行くをを
とハ書とハねりの花そ
眠ちる夫くるあ一つよかる縄
奥ねのもく行くとそ行くうう
▲夜の嘆るとそ行くうう
月くハ西房よおを秋加茂
堅よ成り又接よ成る天野川

仕過ぎしと姫のほとり[illegible]
時ならぬ雨降りて[illegible]
拾ひ身と[illegible]

▲家を[illegible]
金持ち[illegible]
家敵の[illegible]
三月とハのがれぬ命なり
[illegible]中に[illegible]
口をしとて[illegible]
世の中の[illegible]
姫[illegible]
お[illegible]
[illegible]
[illegible]

蚊くらべよまぜて[illegible]

虚風点勝句

▲[illegible]夜ハ大勝の[illegible]
六道の[illegible]
家[illegible]
遊人の[illegible]
山那乃塚の[illegible]
[illegible]の中で[illegible]

▲[illegible]
[illegible]
目[illegible]
大[illegible]
[illegible]

▲ゆうさいといふ者さんの子
娘入のこと病よ仕事を留入
奴奥よて賣時見れ内方酒
村中の家々者しらよ呼也
世の毅人くし質やれ大酒日
言の夜八清酒ゑ賣さ涙
呼ずれ数さしきけぶ声へ
▲墨のトれぬけるのあ
家丈といふ清酒よ成言
酒くし魚ゆをとる博奕宿
魚食てゐり長老の言
▲今数八酒よはられ風
つ人さそ家まんやし酒さ
老八書ハいし涙入も

大将の歳てのうる八城中
角るハ吳あるくし半の家ゆめ
歌の者よ見あるて長娘
▲夕ゆの鳥ゆ今ゆるよ家ゆ
娘さハまるあるゆくの行方
ず樹ハ不者の小性の指そ
入ハ井といふさん今ゆ
新家よ孔くそびのさう言ゆ
掛乞ゆ鄭奏 椀て西くし
▲まゆくくもれて拾ゆ
竹ゆの出くゆ妹拾
数人ゆ娘ゆる太刀を西也
夜布ゆ鉄を娘の者ゆ
嘆毎よんくもくる死人紀

ぶいのそどびろばよとるえの松

▲さてるとぬせバ夜ハねまよろう

第ニとぬ脇ニ入ぶ毛ニ毋ごも

ムゝがゞで初しもあるのあるとしもの意ろ

数のわるとしてもの意ろ

今一ぶなせいりんさりん今ごもと

さむいめをとるう意ろもどゝ

▲おどゝてんくうみぶあう

ト初ハとてもそうぬよ殺ニ毛と

白方ハこう殺ハ方ごよ合とゝや

いやとゝ口よ行あるる彩松

風ニの月ハ姉ニ毛ニ毛ん

泡涙結ニ入ぶ泡の砂

見しう食のゝ墨ニ

▲ゝの永ひのハ牛毛ニ対し

煙ニ毛ニ五月の鼠御ニ毛

涙ニて自鼠ニ毛ニ

雨ごきニ泥ニ毛ニ

影ニも涙ニハありぬすあて

▲月ニさぬくしとおひひ

ゝ毛ぬゝ蘭の根ニ毛ニ

来ル毛ニのゝ人ニ時ニ毛ニ

信ス毛ニハ紙ニ毛ニ

樣ニのニハ草ニ毛ニ

由平点勝句

▲[illegible]さしに戻る人
庶ハ狐ハわかれたるさるも
死出の旅何よ心をおそるん
庶ばゆる中ゲ[illegible]
白らつもゆ心のこゝろ
大九月[illegible]世流の世ゆ
指南く銀を借といひし
七五三のおキハ[illegible]
家が俗ノむ[illegible]同ゆ[illegible]
文ノ人ゆバ[illegible]
いくとるゆの声ゆ[illegible]

▲[illegible]ハ家脂病をとり出
智者と[illegible]
人ゆノ人くゆ[illegible]狐
村時ゆ[illegible]の指[illegible]中
▲朝の云ツ[illegible]
あ[illegible]
▲[illegible]
月よ[illegible]
▲霜ま[illegible]
清伏の枯[illegible]
[illegible]食の[illegible]
恋塚の[illegible]
やり[illegible]
[illegible]

和しや別さ戸入て荒れ果て
▲上ゝを下ゝ見入て
愛ていさばさの中すう漂庶
面白やそのゆ鳴目乃こぼ梅
流星さかゝるあくをさ
神ゝや光りはら沢が男ヶ
いしやや蛙ゲ鳴ものに鳴し
▲蛙なまの雲の一つ水
蛙ゝらさせしむさか沢ゝ
おのゝ月の鳴時が鳴
面をとて面をとらゝ鳴蛙
▲亜しのすゝ月の入ゝ
一調よさけてハ蛙の鳴
少ゝ風ゝ沢ゝ

二里行ゝ一里戻ゝ同ゝ浜
釜ゝみの お男を止て打伏
まぬ間ハ恋を合まよ打伏
▲おゝ松ゝの中よりゝ
中毋今年ハ梅キ者ゝ
高灯籠ゝ
引ゝ不伏ゝ
御首を乃池乃袋ゝ隠ゝ
石山ゝ三井の寺の入ゝ
▲ほのゝゝ金の入ゝ
あゝ世ゝ家ゝ
鶏ゝ鳴ゝ咲ゝ杜ゝ
▲老角ゝ
名年八令ゝ入ぬ武士乃家

▲言葉の柴もき京の商人
蛸ゝ思ひめるもちぶるゝ
だるこゝ数多の孔を注りや
商ム国ゝ松とはのて立ち
情ゝんゝし賞ゝ切をる
▲蛸えるゝ学ばゝ移ゝ
咲花の下ゝ水ゝほりつゝ
家ゝの椿ゝ根ゝ他椿
▲主ゝゝゝゝ
解ゝて
ニ人ゝ中ゝ後ゝ
ゝと埋し堂乃ほの椿花

万治点勝句

▲月ゝ船ゝ入ゝ
浦ゝ
和の他ハいゝ
掛ゝ
癖ゝ
浦ゝ
▲ゝゝ
人ゝ中ゝ
布ゝ
大ゝ月ゝ

灯火のさんぬ間ろ意の法
ちぐまに殿まさとくれわ
▲おもしろかつ家入るし
作をくで外よ仰りとおろ
月のうめさかいて拾つて意の示
別ならいお祝しに水とるとはし
▲又ごごでいい御りおすぐさ
見直八月なこ作しるひ
ひ様のしくや一日八こるへはし
とくよ今下八意のえでし
えもそ廣てくや法華浪
▲天宗役逃免そ祭る
鉢頭ほ春ぬ人日一斛
下戸のえるえ花くさけて昭そ

上戸のハ酒てしるぬ鶏
法花でもやといまね奉加帳
食ーえ人拾ひのかくよ餅
▲夜ねよ出くく日の言れはそ
鰯沢のくぼーるもえし
さしさしうさも大工の屋
大工し成し今ふくくる
鉢まをひとりしまのえそげ
▲りまかくく意のおし
川ふよハ氣ようえもえた
火のえハーやるもあ紐
ふひそ叩ぐりそいもひぐ
ひ伽みの弟さかるもうこで
人のえぬ市師迎ぐ念都そ

▲あやうき地と神をうしなふ
ものゝ上に棒
又生れ出る風俗を
なる殿よりはじめて
▲毛ゝよりの人ゝ
姑乃とりしこゝろ
さまいのあぶくまの能
▲正月中ハ松ひそせ
御車ほうり抑て
かひ餅も一ツニツハ
わびてのびして

岸柴点勝句

▲心ゝいろ一面乃あと
とゝまる人なゝ風のあとゝ
我宿乃碑とさまゝ時ゝ
蜘の巣にまつとも同ク杜乃
▲こゝゝ云ゝ乃ゝ四ゝ月ゝ
ゝくゝゝ咲ハ楓乃ふりくて
む月ゝゝ忘ゝ楓ゝ
和ゝゝゝゝゝゝゝ京乃ゝ
素ゝ花ゝ蛍ゝ廣ゝ夜乃ゝ
ゝ蛍乃色ゝゝゝゝ秋乃月

因水点勝句

▲女ゝ中ゝ打ゝゝゝゝ
二位殿乃ゝゝゝゝ
茶ゝ入ゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝ金ゝふ神ゝゝ

楓塚西吟点

▲人乃苦ゝゝ
ちゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ

浴をする妹ぐそくのまうし
さと捨て呑むべきの水の味

文流点勝句

▲こゝろよくよ朝の鐘
又山と三井とにとゞむ雨
夜ゆしいくうあきてきたれ
されども水盃よ言葉かく
乞食の寒さ行かり寒さ
又郭中のかくあれ恋の時
行くくはんたんしゃ
戦場の夜さの寒さ別れ

盤水点勝句

▲先一面りやくはくしゃ
何時もをくるあをたるを
ふしぬ奥ゞ死を逃ゝべを
ゆくまたたをけらをまたけ
立腹しまよかつまり郭弓
わくはよ寺ゆくまる遠の
▲世のゆくせと異定
解しとうゆくしゃ球男のうくく
産時ハ生もゆ死ざゆ
山置しをんゞ心ゞ死の京
傾城入奥吟食ハぬ月しまと寅
かいゆくの須よ桂大刀丈血

固女点勝句

▲後ハ立ともしたしいうれど
蘭分て行ゝ梅の香
死ぬるとゆめぬ某ひとと言ふ
仏ゞの後ゝ小夜衣
姑よりひかるゝ我カ男

盤水点勝句

▲寒そ泊と呑て行ゞ
苔の花のちゝ蓼の
泊ゝいるひとせば男
傍なゞ乳を
幸と呼ゞ伏人の
ゆるゝあちゝ月夜

江戸点ノ巻

▲元ゝ不集ゝ
世と味ゝ行ゝ
蕎方は言ふ
九更の嶺を
老ノ若キ死ゝハ同ゝ
名月を寂寞
仰ゞ所ゝ歌則と入もちゝ
素俳諧雅
文名人銀
白里月月
名人新加
永僧流人

夜度とかんわるね額の母と妻
君はれ和尚行の統の就国の調和
貧持の金福神の法りめ
世寺の天拘酒無りのと
老義の笑を死し多と
聴れ表の為へる祈る国変
迫脱人世の無況死後れ為
誰今和尚よりの祈飯彫柳
耳塚作法実教加れ家
月に変人食の屋門筆さん
驚き死人なれぬ法
雷の減る乳と産金変る
乗寝席の海のるれき紙
貪福の変かるれる新山

佛ら漆の和尚生る世の
落下ル新月指鄙かる海て
長遠し恋に近き紙の心
世と骨の野北山ゆる法
村とに実ふ米休金作て
鶏城や極まる新れて五
天竺国寶人穀の市間
烏牛森とわをまぬ為
焼塩に賜り形乃ち焼
洋と風に行池ん石
引宮れ蓋に紫を法をぐる
富の金魚の電の蟲蛇
ちの関くどん狐れ表毎墓
変作為れ祈とみち山

武蔵国金沢文庫の郡家の図より
軍津乃郡より
世に名高き栗八幡宮
女院の御願を高
能登津の海
石清水八幡宮
長人高氏
江戸点の懐紙より
よつてうつしぬ点者名を
くぶきつめ

八月八日学士仙二卷

我
高崎より
あつまとなりぬる屋の山雀
魚販月乃朝市
まうゆうゆうゆう砂の月
ゆうゆうゆう
長松乃洞
出雲ごとしらを
酒をめて八ツの甕に
浴衣
宮宕口
花乃うとわ大代の古郡

雨そそぐ砌のうるほひ盃をあて
芭蕉葉に墨するまま庵の中
素でおよがれやすきよりうれ
麻はまとぬ苧をうて月ぞすゆく
芋とる畑の畦や乱の擂鉢
めるみて為乃閑泡をうて
かもの塚の塚もしら焼所あり
細刀のうへわとの古宮
菅笠乃ふれとまるて対とまれ
紙ふる蔵れかんたきを
蓑はれ雨をわまるけ月ふれ
切窓ふ[illegible]小擂黒髪
男はきやうの元れ紙を飾んく
唐れ原裏に独り寝ん義

夜まれ月猫やうふ揚る音
[illegible]はきく新稲流と川
[illegible]乃秋雨く彦れ
細代嘆よ公家の茶とき
宮法へ松の酒四辺都ぢ
四枝やれ市今あいの山
枝の凡面乃ふとし紅やれ迎
花と池御や鯖ち乃衛
樵木つひそらてて藤
[illegible]はしのがる田今ふ

面六句 我黒点 ウ十二句 俳敢点
二十三句 言水点 ウ六句 梅盛
ろまき点のおくうきなめ
そもものより

調和　再仙

其

[illegible]

二如

[illegible]

面 調和点　ウ 六角点　ウ 六角点

ウ 如泉点　ウ 六角点

けまきめつ

真書あり

関をまた八角にて勝負

ゆ　都乃刑者

石ぶ点をこれ

いろ　のすぐこしなる

ま　ゆ　ふ

ま　の味ひ

拍子車は宇にまろき

しまざまにて

兵商売の真手

面八句点九

[illegible]

如泉やとまりし

固水

好春

言水し

我黒しひなう

如泉やとまりし

常牧

只丸し

晩山

定之

蛙の三ツ二ツ生る池沼

好春

言水

我黒

只丸

如泉

固水

晩山

常牧

定之

樂八旅乃詠ノ声添て

如泉し

言水し

好春し

我黒し

晩山し

国水し

定之し

常牧し

只丸し

文字能きるふ月の本

如泉し

国水し

只丸し

晩山し

言水し

我黒し

定之し

好春し

常牧し

萩蒔絵

如泉し
周水し
好春奥し
只丸し
常牧し
言水し
晩山し
我黒し
定之一句

霜朝

秋ト定る

春ト定る

好春し
如泉し
言水し
常牧し
周水し
定之し
只丸し
晩山
我黒

秋ト加る

春ト加る

霜ハ冬

霜ハ冬

秋ト定る

秋ト加る

春ト加る

霜の色

鏈八橋（キヤナホコ カツラ）をさそりてよめる

言葉のあやしの所々
枕詞なり

如泉（ゆきゝ）
我黒（わくら）の
晩山（ばんさん）
言水（ごんすい）し
周水（しうすい）し
只丸（ただまる）
好春（こうしゅん）し
定之（さだゆき）

一百の忍ハ城の春ちかし こし
なそかりさしてかりそめ
四月のまつ夜の後の橋姫

常牧（つねまき）
鶯（うぐひす）を待重陽（まつちやう）

周水（しうすい）
如泉（ゆきゝ）
好春（こうしゅん）し
我黒（わくら）し
晩山（ばんさん）
言水（ごんすい）
只丸（ただまる）
定之（さだゆき）
常牧（つねまき）

好春　八点　門　花二　長一　珍二

付味甫吟ふ所なり

我黙　七点　門　柔一　長二　珍二

此まきあつらしく

如泉　七点　門　長二　珍三

團水　七点　門　長二　珍二

常牧　六点　門　長二　丸二

言水　六点　門　長二　丸三

安之　四点

方山　他生ノ句

幸佐　他生ノ句

大夫人さいとゝ　ゆあまさや

栃かぐらゝ　ゝ　長丸　金色

沈紀　ゆうもんもゝ　八云ゝ

ぬゝ　まゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

書集ゝ　ぬゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ今世乃時　花りの風

俗の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

て　ゝ　ゝ

元禄七年　　瓶月菴

如月　難波書林　開板